

場面緘黙当事者・経験者と対照群における精神・行動の問題と社交不安、発話の関連および比較

田中 佑里恵

(京都大学大学院人間・環境学研究科; 現所属: 名古屋大学教育学部編入)



©2023 田中 佑里恵

問題と目的

場面緘黙 (Selective Mutism, 選択性緘黙) とは

- 他の状況で話しているにもかかわらず、話すことが期待されている特定の社会的状況において話すことが一貫してできない状態
例) 家では話せるが学校等ではほとんど話せない
- 不安症の一種 500人に1人程度発症 発達障害者支援法の対象
- 名称 DSM-5-TR: 場面緘黙 DSM-5、ICD-10: 選択性緘黙

本研究の目的

場面緘黙当事者、場面緘黙経験者、対照群における精神・行動の問題と社交不安、場面緘黙症状により抑制される発話の程度を比較
精神・行動の問題と社交不安、発話、群との関連を明らかにする

方法

対象者

	場面緘黙当事者群 (n=5)		場面緘黙経験者群 (n=21)		対照群 (n=9)	
	Mean (SD)	Range	n	Mean (SD)	Range	n
年齢	20.80 (2.95)	18-25	5	21.29 (2.12)	18-25	21
性別	男性		2	3		3
	女性		3	17		6
	その他		0	1		0

当事者・経験者は自助グループ・SNS、対照群は大学の講義後に依頼

調査内容

ウェブ調査、以下の質問項目を用いた

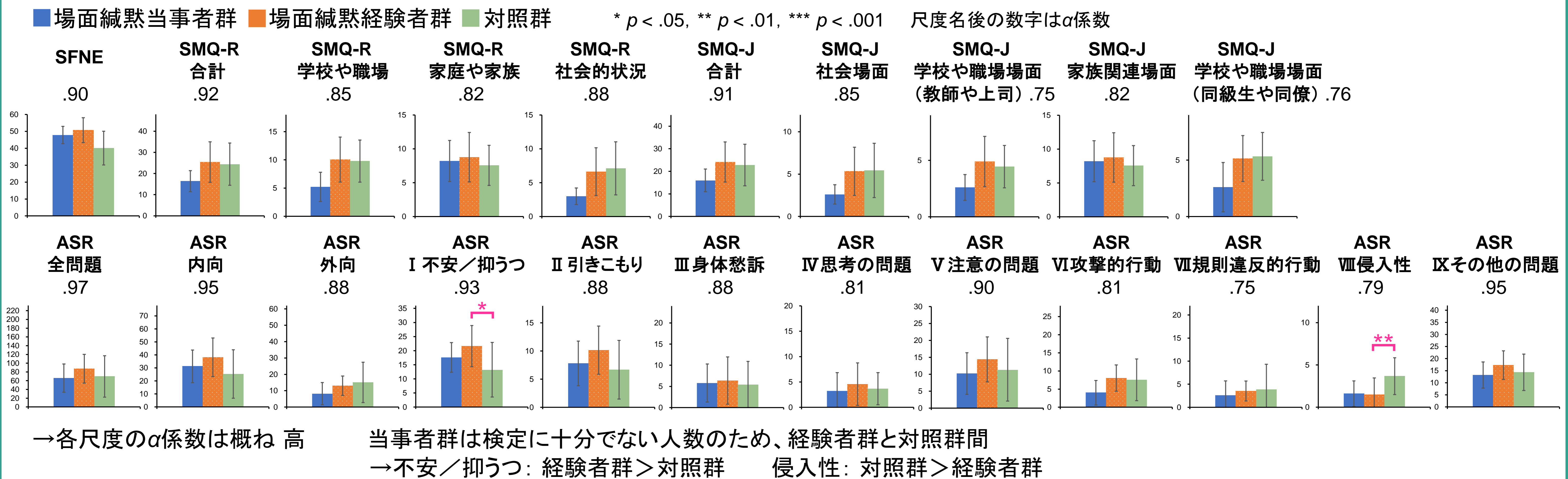
- ASR (ASEBA) 大項目Ⅸ 尺度Ⅰ-Ⅸ: 精神・行動の問題 123項目3件法 (0-2)
- SFNE: 社交不安 12項目5件法 (1-5)
- SMQ-R (改変) 兼 SMQ-J (改変): 発話 16項目 兼 15項目4件法 (0-3)

倫理的配慮・利益相反

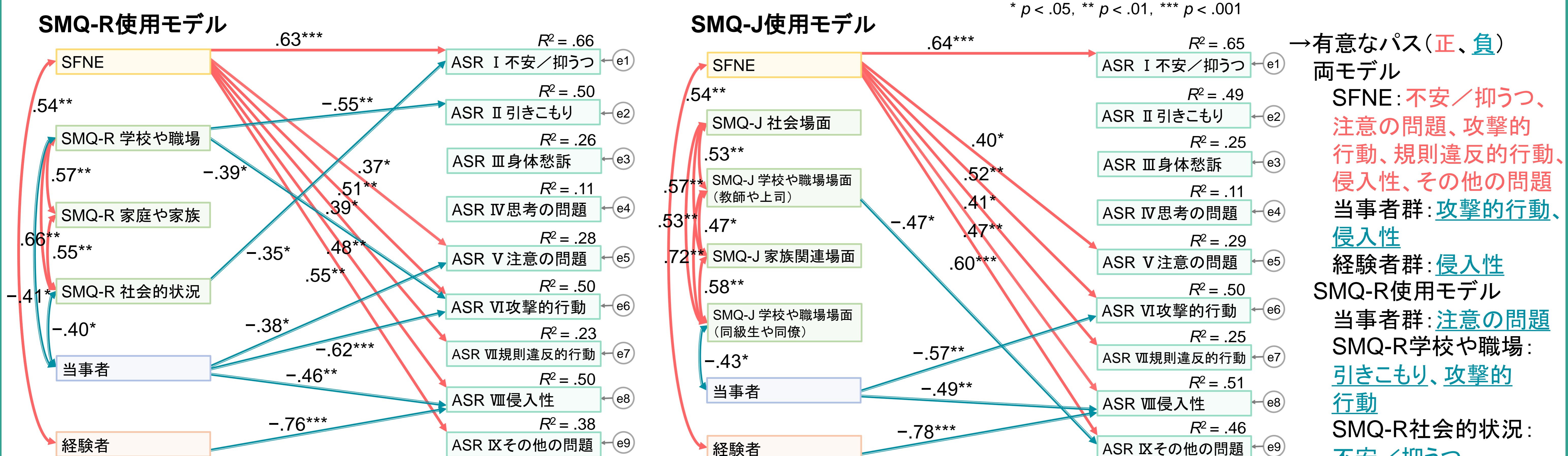
京都大学大学院人間・環境学研究科人間情報研究・動物実験倫理委員会の承認を得た(承認番号30-H-6) 開示すべき利益相反関連事項はない

結果

全体・群別の記述統計量と信頼性係数および場面緘黙経験者群と対照群間でのウィルコクソンの順位和検定



パス解析



各モデルの適合度

	χ^2	df	p値	GFI	AGFI	CFI	RMSEA [90% CI]
SMQ-R使用モデル	10.07	1.00	.002	.97	-2.87	.98	.51 [.26, .81]
SMQ-J使用モデル	10.07	1.00	.002	.97	-3.12	.98	.51 [.26, .81]

→両モデル GFI、CFI: 良い χ^2 検定結果、AGFI、RMSEA: 良くない 適合が良いとはいえない

考察

- 群によらず社交不安の高さは多くの問題に、学校や職場およびそのうち教師や上司への発話の抑制は数個の問題に影響
→治療や支援の必要性
- 家庭での発話の抑制の影響は見られなかった
- 対照群は、分析に共通して侵入性が経験者より高く、パス解析では加えて当事者より高かった
→当事者および経験者における他者に目立つ行動の少なさが示唆
- 本研究の限界: 当事者の人数やパス解析の適合度が十分でない点